

スピノザの親友イエレスの 『普遍的、キリスト教的信仰の告白』

—前書き、第一条、後書き及びリユーウェルツによる跋文の翻訳と解題—

平尾昌宏[†]

“Confession” by Jarig Jelles, a Friend of Spinoza.
Abridged Translation and Commentary.

HIRAO Masahiro

解題：イエレス『告白』とスピノザ

—はじめに

スピノザの残した書簡の中には、彼の親友ヤーラッハ・イエレスに宛てたものが数通残されている。しかし、イエレスの側からスピノザに宛てた書簡は、1925年に刊行され、長く定本として用いられてきたゲープハルト版スピノザ全集には、一通も収められていない。これを打ち破ったのがアッカーマンらによる新オランダ語訳スピノザ書簡集（1977年）であった¹⁾。

しかし、ゲープハルトもこの「書簡」の存在を知らなかったわけではない。恐らくは、意図的に収録しなかったのである。なぜなら第一に、当の「書簡」とは、イエレスの著作『普遍的、キリスト教的信仰の告白』（以下『告白』と略記）の一部、具体的には前書きと後書きそのものだからである。

以下にその翻訳を収めたので、具体的にはそれに就いて見られたいが、当の前書きと後書きは「尊敬する友よ」から始まる、明らかな書簡形式で書かれている。しかも前書き、

[†]大阪産業大学 教養部 非常勤講師

草稿提出日 3月1日

最終原稿提出日 3月1日

1) この点について簡単には、平尾[2017]でも触れた。本稿は、その稿に言う「スピノザ書簡集を作る」作業の一環であるが、イエレスの著作と思想への注目を促そうとする点で、その範囲を逸脱する面を持っている。

後書きは一連のものである。そして、両者に挟まれた本文は、その添付書類なのである。その正式タイトル『某氏に宛てた書簡に含まれた、普遍的、キリスト教的信仰の告白』の通りである。つまり『告白』は、少なくとも形式上は、その全体が一通の長大な「書簡」なのである。従って、もしこの「書簡」をイエレスのスピノザ宛書簡だと見なすのなら、本文も丸ごと「スピノザ往復書簡集」に収録しなければならないことになる。しかし、それは果たして現実的であろうか。実際にそこまで踏み切るにはかなりな思い切りが必要であろう。

また第2に、この「書簡」が本当に書簡であったのか、つまり、イエレスが実際にスピノザに宛てて送った手紙であったのかが定かでないという事情がある。このタイトル中に含まれた「某氏」がスピノザを指していることは、幾つかの証言から確実である（後述）。しかし、たとえそうだとしても、この体裁は単に著作上の修辞に過ぎないかもしれないからである。

このように見てくるなら、ゲープハルトがこの「書簡」を全集に収録しなかったことにも一定の理由はある。しかし、スピノザとイエレスの親しい関係を考えれば、この文書が資料として重要なことは疑いない。それは著作としてはイエレスのものではあるが、後で見ると、スピノザとの交流の中から生まれ、修正されたものと考えられるからである。従って、これを「書簡」として「スピノザ書簡集」に組み込むか否かに関わらず、この文書の重要性は確認できるのである。

しかし、『告白』は、従来、ほとんど研究されてこなかったように思われる²⁾。本稿は、そうした研究に取りかかるというより、そのための準備作業に過ぎない。だが、今までの欠落がある程度は埋めることになるのではないかと思う。

——イエレスの生涯

まずはイエレスの生涯を概観しよう。

とは言え、没年は1683年であるが、その生年も正確には分かっていない（1619年もしく

2) 管見の範囲では、日本ではイエレスを主題的に論じた研究は見出せなかった。Spruit, L. [2011], *Un cristianesimo ragionevole: la cristologia di Jarig Jelles*, In: Hermanin, C.; Simonutti, L. (ed.), *La centralità del dubbio. Un progetto di Antonio Rotondò*, vol. II, Olschki.及びKlever, W. [1997], *Mannen rondom Spinoza, Hilversum* (この第7章が、「ヤーラッハ・イエレスにおける正統派としての決定論」)は残念ながら見るができなかった。ここで参考になったのは、スピノザ書簡集の各国語版やスピノザの評伝(フロイデンタールやナドラー)が提供している基本情報を除くと、Fix [1987]とSpruit [2004]のみである。煩瑣を恐れて一々の出典指示は行わないが、我々の以下の記述でも、事実関係に関してはそれらから得たものである。

は1620年)。生涯についてのまとまった報告としては、以下に訳出した『告白』への跋文(出版者ヤン・リューウェルツによる)が残されているが、これもそれほど詳しいものではない。従来の研究を総合しても、スピノザとイエレスがいつ、どのように知り合ったかを始めとして、我々にとっては分からない方が多いと言いたくなるほどである。

オランダ・デカルト主義の影響を受けている³⁾のは確かで、またその宗教に関しては、恐らくはバリングらと同じコレギアント派に属していたというのが多くの論者の見方である⁴⁾。生業としたのは穀物の取引である。

しかしリューウェルツの証言によると、真理への情熱止みがたく、盛業に達したところで商人を止めたという。没年から逆算すると、1650年代の途中、30代半ばで引退したことになる。そして、死ぬまでの30年ほどを学問に費やしたと。

しかし、その学問も彼自身の魂の救済、いわば実存的な関心に基づくものだったらしい。イエレスはオランダ語しか解しなかったし、また、生前刊行された著作があるわけでもない。この点では、同じスピノザの交流関係者でも、かなりの知識人であったメイエルなどとは違っている。ただ、唯一書き残し、彼の死の翌年(1684年)にリューウェルツによって出版されたのが、問題の『告白』である。

——スピノザとイエレスの交流

彼とスピノザとの交流が生まれた所以も必ずしも明らかではない。バリング、クールバハらの付き合いと同じく、コレギアント派のコネクションによる可能性と、ド・フリースらと同様の商人仲間による繋がり可能性、2つが考えられる。

上に触れたようなイエレスの学問研究のあり方からすれば、彼は専門学者、確立された作家というより、学問愛好家、好事家と言うのがふさわしいかもしれない。しかし、元は商人であったイエレスが、後半生を真理の探究に捧げたというリューウェルツの証言を信じるなら、彼がスピノザと交流を持ち、それを保ったのは、彼のそうした真理への情熱によるものだったろうと思われる。

3) オランダ・デカルト主義に関しては比較的研究が進んでおり、近年ではDouglas [2015]や、日本でも桜井 [2014]や加藤 [2014], [2015]といった優れた論考があるが、イエレスが取り扱われることはほとんどない。イエレスは市井の好学者であって、当時の代表的なデカルト主義者だとは言えないからであろう。同じくスピノザの周りのデカルト主義者でも、イエレスよりもメイエルの方がまだ論じられる機会が多い。

4) 例えばBunge [2012]は第4章をコレギアントとスピノザの関係に宛てているが、そこで取り上げられているのはクールバハやバリングで、イエレスはただ1箇所で触れられるだけである(p. 51)。ただ、Fix [1991]はイエレスにも注意を払っており(pp. 205-210)、「スピリチュアリズムから合理主義へのコレギアント派の進化の興味深いサンプル」だと見ている(p. 205)。

他方、スピノザからしても、イエレスは単なる知り合いといった程度のもではなく、かなり親しい友人、親友といってよい存在であった。そのことは、数通残されているイエレス宛のスピノザの書簡（書簡39, 40, 41, 44, 50, 84）、特に書簡冒頭の呼びかけの言葉からも窺える。そのほとんどが、「拝啓 (Myn Heer)」といった形式的な表現ではなく、「大切な友よ (Waarde Vrint)」という表現を用いているのである⁵⁾。

イエレスからスピノザに宛てた書簡が、以下に訳出した『告白』の前書き、後書き以外に残されていないのは残念だが、イエレスがスピノザ哲学のために成し遂げた貢献も明らかで、こちらはイエレス側からのスピノザに対する友情や尊敬を十分に示すものである。ライプニッツが1676年に書いた覚書によると、イエレスがスピノザを「養っていた」(Stein [1890], S. 282-3) とあるが、それは話半分だとしても、少なくとも以下の点は確認しておくべきである。

1 : スピノザに『ルネ・デカルトの哲学原理』を書かせ、出版させた（そのための資金援助もしている）。

2 : 『神学政治論』出版後には友人のフラゼマケル (Jan G. Glazemaker = 蘭訳遺稿集の責任者) に蘭訳させている（ただし、スピノザの希望でそれは出版されず、没後の1693年に出版されるに至った）。

3 : スピノザに『政治論』の執筆を促した（書簡84）。

4 : 更には、スピノザの死後、ラテン語版、蘭訳版の遺稿集を友人たちとともに編纂し、それへの序文を起草したのも彼だと思われる。恐らくは資金を出したのも彼であろう。

つまりイエレスは、スピノザの6つの哲学著作（未完のものも含め）のうち、少なくとも3つの出版、翻訳、執筆に関わっており、その他の遺稿も含めて我々に伝えてくれたという意味で、スピノザ哲学受容の歴史に決定的な役割を果たしたと言っても過言ではない。

——『告白』を巡る文通

2人の間に、単に外面的なつきあいを越えた思想的な交流があったことも、『告白』の成立事情から十分に窺える。スピノザに関心ある者から言えば、ブレイエンベルフとの書簡のやり取りや、フェルトホイゼンによるスピノザ『神学政治論』評（書簡42）などとともに、スピノザ哲学受容の最初期の例を示すもの⁶⁾とも見ることができよう。ただし、そ

5) この表現は、面識が出来て以降のブレイエンベルフ以外には用いられていない。ただし、書簡では正文テキストの確定に難しい問題があることは確認しておくべきであろう。平尾 [2017] 参照。

6) ミニーニ版は、ブレイエンベルフの理解には、後のスピノザ受容において広範に受け入れられることになるスピノザの決定論への批判的な受け取り方の原点が既に見られると指摘している。

の点を具体的に知るには、『告白』そのものの検討が必要である。ここでは、『告白』の成立に関わる基本的な事項を確認しておくに留める。

後掲する前書きやリュウウェルツの跋文から知られるように、『告白』著述の意図は、デカルト主義者が異端的な宗教観を抱いているのではないかという人々の疑念を払拭することであった。

イエレスはその草稿を「郊外に住む友人」に送って講評を請い、その友人は「貴方の書き物を嬉しく読ませて頂きましたが、そこに私が手を加えることができるものは何もないと思いました」との返事を送ったという（ゲープハルト版書簡48bis, 資料D）。

リュウウェルツはこの友人の名を明記していないが、同じ話がピエール・ベールの『歴史的批評辞典』の「スピノザ」の項にも見え⁷⁾、そこではこの友人がスピノザその人であったことになっており、リュウウェルツが記録しているのと同内容の返事もスピノザのものとして引用されている（資料E）⁸⁾。更に、ハルマンの旅行記におけるこれと同様の記述（書簡48bis⁹⁾、資料B）からも、この友人がスピノザであったことの更なる確証が得られる。ゲープハルト版は、『告白』中の書簡体部分は採用しなかったが、リュウウェルツが引用する「友人」からの返信とハルマンの記述は本文に、ベールによる引用は校注に収める形で、以上3つの資料を取り入れている。

しかし、これら3資料には微妙な違いがある。ハルマンの記述によれば、「スピノザは、その返事の中で彼のことを賞賛もしていなければ是認もしておらず、ただ一つだけ疑問点があると、彼に告げている」。だとすれば、畠中やロヴェールが指摘するように、これはリュウウェルツの跋文やベール『辞典』での返信とは違っていると見なければならぬ。つまり、ゲープハルト版ではこの点が捉えにくくなっているが、イエレスはスピノザに2度草稿を送っており、スピノザの返信もそれに応じて2通ということになりそうである。

そこで、この点に関わるイエレスとスピノザのやり取りを再構成すれば、次のようになると思われる。

(A) イエレスは依頼文を添えて『告白』の草稿をスピノザに送り、(B) スピノザはその

7) ゲープハルト版では校注で引用されている。テキストはフロイデンタールの資料集、ヴァルターがそれを増補した新版(Freudenthal 1899, S.32, Freudenthal 2006, IS.66)にも所載。邦訳は、渡辺 [1962], 78頁以下、ベール著作集、第5巻、686頁。

8) リュウウェルツはイエレスの「友人」の手紙を地の文と同じくオランダ文で引いており、一方ベールはラテン語で引用している。スピノザは、イエレス宛の書簡ではオランダ語を用いていたと思われるから、リュウウェルツが引いている書簡が原書簡に近く、ベールの引用はそのラテン訳ではなかったかと思われる。

9) ハルマンの手記の該当部分は、ゲープハルト版にも抄録されており、その邦訳は畠中訳に収められているが、渡辺 [1962] (175-177頁)の方が詳しい。

内容に一部疑問を提した。そのため、(C) イェレスは草稿を修正し、再びスピノザに送った。(D, E) それに対するスピノザの返事が「そこに私が手を加えることができるものは何もないと思いました」であったと。

整理記号	差出人→受取人	状態・出典	ゲープハルト版	暫定書簡号
資料 A	J → S	『告白』草稿	現存しない	
資料 B	S → J	ハルマン記録	48bis (2)	書簡 48 - 2
資料 C	J → S	『告白』完成稿	未収録	書簡 48 - 3
資料 D	S → J	『告白』跋文	48bis (1)	書簡 48 - 4
資料 E	S → J	ペール報告	校注に引用	書簡 48 - 5

しかし厳密に言えば、現行の刊本『告白』に収録されている前書きと後書きが、そのままイェレスからスピノザへと送られた書簡そのものであったかどうかは定かではない。更には言えば、前書き、後書きがスピノザに宛てた書簡そのものだったとしても、それがAの段階でのものか、Cの段階でのものかという疑問も生じるには生じる。

ただ常識的に考えて、特に最初の草稿には、それへの講評を求めた依頼文が添えられていたと見るのが自然であろうし、たとえ文言は少々変更されているとしても、その依頼文が現行『告白』の前書き、後書きとして整えられたと解するのが妥当であろう。だとすれば、『告白』は表題通り、イェレスがスピノザに送った書簡に含まれていることになる。『告白』を、その本文までを含めて、「スピノザ書簡集」に収録してもおかしくないのではないかと述べたのはこのためである。

——スピノザにとっての『告白』

しかし、先にも述べたように、『告白』本文を「スピノザ書簡集」に収録するかどうかといった問題だけが重要なのではない。その点を抜きにしても、『告白』の成立そのものがスピノザとの交流と大きく関わっていたことは以上のように確かめられるのであるから。

そればかりではない。今回訳出した『告白』の前書き、友人に宛てた体の前書きの中で、その名宛て人である友人(すなわち、スピノザ)こそが『告白』執筆を促した張本人であると述べられているのである。確かに、リユーウェルツの証言によるなら、人々の疑念、中傷が『告白』執筆の契機であり、書き上げたものへの講評を求めるためにその後で友人に送ったように読める。だが、前書きに見られるイェレス自身の証言によるなら、そもそもきっかけは当の友人、すなわちスピノザその人に帰せられることになる。つまり、スピノザは書き上げられた『告白』を後から第三者的に講評しただけというのではなく、そ

もそも『告白』を書かせたのがスピノザだったことになるのである。

リューウェルツの説明か、イエレス本人の証言か、いずれが事実であったかは議論の余地がある。だが、イエレスがスピノザの著述、出版に大きく関わっていたように、スピノザもイエレスの執筆に決定的な影響を与えていた可能性が十二分に考えられる。だとすれば、その執筆に当たったのがイエレスだったとしても、『告白』は明らかにスピノザ哲学の問題圏に属する著作なのである。

——各国語訳書簡集における処理

ゲープハルト版は結局『告白』の中の書簡部分を収録しなかったのに対して、これを初めて採用したのが、上にも触れた新蘭訳である。これ以降に出た、私の管見した限りの「スピノザ書簡集」各国語版、すなわち、ゲープハルトの独訳を増補したヴァルター版、シャーリーらの英訳、ミニーニらの伊訳、ロヴェールの仏訳、サンジャコモの伊訳、カーリーの英訳は、全て『告白』前書きと後書きを書簡の一つとして収録している。そればかりか、ロヴェールの仏訳は『告白』本文の抜粋を付録に収め、今のところ最も新しいカーリーの英訳は、同じく抜粋を本文に収めるに至っている。

とは言え、カーリーが本文に収録したのは、ロヴェールが付録に収めたよりも分量的に少なく抑えられており、ほんの一部であると言ってよい。また、今後、この傾向が継承されるかどうか定かではない。恐らく、全文が「スピノザ書簡集」に直接的な形で組み込まれることはないのではないかと思われる（補巻、別巻や資料編という形ではあり得るであろう）。しかし、イエレスの『告白』が、今後のスピノザ研究において一定の位置を獲得する可能性は、前節で記したような推論やこうした研究の流れを踏まえると、高いものと思われる。

——スピノザ哲学とイエレス『告白』

だとすれば我々の関心は、やはりスピノザ哲学とイエレスの思想の異同に向かう。これについては今後の研究に待つべきであるが、簡単に触れておくことにしよう。実際、『告白』を一読、両者の類似性も、また相違も容易に指摘できる点がある。新蘭訳やカーリーの訳注及び解説が簡潔に示している点も勘案しつつ、ざっと整理しておこう。

両者の共通点から言えば、まず、『告白』の中心テーマとも関わる普遍宗教の提示が挙げられる。イエレスが神への愛と隣人愛を普遍的宗教の内実とする点（特に第3条）は、スピノザの『神学政治論』（特に13, 14章）と重なる面が認められる。「救いのために人々のなすべきことについて」と題された『告白』第3条は、「私は次のことを信じます。す

なわち、キリスト教信仰全体、あるいは、私たち人が最高の救いを得るためにしなければならないすべてのことは、律法の中にある次の2つの命令の中に含まれているということです。すなわち(1)心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ、(2)自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」から始められている(Jelles¹⁰⁾, p. 27)。しかも、この神への愛は認識、とりわけ「純粹に知的な認識」(Jelles, p. 36, p. 112)によるというのである。ここからはスピノザ的な神への知的愛(『エチカ』第5部定理32以下)が想起されても不思議ではない。

第2に、聖書解釈の方法を論じて、ローマカトリックにおけるように聖書解釈の権利を教会権力に帰属させることを批判していること(本論第2章)、第3に、自由を論じて、自由意志を否定する論陣を展開していること(本論第4章、特にJelles, pp. 154-6)などは、スピノザとの目立った共通点である¹¹⁾。

そのためフロイデンタールのスピノザ伝などは、聖書の言葉を「新解釈してそれに哲学的な思想を付け加えながら、神、神の子そして聖霊について、また義認そして自由意志について語る。これはスピノザとまったく同じやり方であった」(フロイデンタール [1982], 117頁)とまで断定している。これはさすがに言い過ぎであろうが、いずれにせよ、両者に近い面があるのは明らかである。

一方、その違いもかなりはっきりしている。特に目立つのは、イエレスが善なる創造者としての神、そして、自らを犠牲にしたイエスを信じている点(これは、以下に訳出した第1条に顕著である)である。その点を含めて総じて言えば、スピノザが哲学を足場にして宗教を論じたのに対して、イエレスの方は、明らかに宗教、キリスト教の立場に立っている。また、スピノザの知的認識が至福へと至る倫理上の手段であると同時に、自然認識であったのと違い、イエレスの場合には知的認識は自然認識とは区別された靈的認識である(Jelles, p. 113)。

ただ、それがいわゆる正統派の教義と異なるのは、キリスト教に普遍的な要素を見出すことによって、その内容を哲学化する可能性を示していることである¹²⁾。イエレスはイエ

10) 以下、『告白』からの引用はリューウェルツ版の頁数による。リューウェルツ版は判読の難しい箇所もあるため、今後は蘭伊対訳版(Jelles=Spruit)が標準的なテキストとして用いられる可能性が高いが、後者にはリューウェルツ版の頁付けが付されているからである。

11) ただしこの点は、スピノザの場合のように哲学的な決定論的主張とも読めるが、プロテスタント的な予定説とも読める面があることには注意すべきであろう。

12) もっとも、それがイエレスのデカルト主義から来るものなのか、それともスピノザ哲学からの影響から来るものなのか、それとも別な面があるのかは、俄には決定できない。Fix [1991]の見解は先の注2)でも触れたが、本論第4章でイエレスが、ユダヤ教とキリスト教の区別に関するカルヴァンの見解を援用している(Jalles, pp. 144-147)ことなどからすれば、プロテスタンティズムの影響とも

スを信じているが、イエスを神のロゴス、理性ないし知性と捉え、それが我々にもたらしめたものは神の真なる認識だと解するのである¹³⁾。この点は第2条に詳しく説かれているが、以下に訳出した第1条の末尾にも見られる。

敢えて図式的に整理するなら、スピノザが我々の至福に至る道として、自然認識にも通じた神の認識に基づく知的愛を主張するのに対して、イエレスは、内実においてはそれに近いもの（「純粋に知的な認識」）を主張しつつ、飽くまで救いへの道としてのイエスに焦点を当てている。それも当然で、スピノザは独自の哲学的な思考に基づいて結論を導いたのに対して、イエレスはそれを飽くまで聖書に基づいて確証しようとしているからである。

こうした点を踏まえ、上野がスピノザの『神学政治論』を「無神論者は宗教を肯定できるか」（上野 [2006]）という観点から読んだその問題提起に準えて言えば、イエレスの『告白』からは、「宗教者は哲学を肯定できるか」という問題提起が可能であるかもしれない。

いずれにせよ、この両者が極めて親しくしていたことを考えても、彼らの見解の異同は、スピノザの思想の理解のためにも、宗教と哲学の関係についての理解のためにも興味深い。その詳細の確認と異同の確定には、慎重な検討を要するであろうが、そうした試みには十分な意味がある。改めて言うが、本稿はそのための準備である。

——遺稿集序文

しかし、イエレスの思想とスピノザ哲学の関係を考えるに先立って、イエレス自身の思想を明らかにする必要がある。そのための参考になるイエレスの書きものは、『告白』の他にはスピノザ遺稿集への序文があるだけである。しかし、その遺稿集序文は従来、さほど注目されてこなかったように思われる。

例えば、フロイデンタールの資料集 (Freudenthal [1899]) には収録されておらず、ヴァルターによるその増補版 (Freudenthal [2006])、ウォルフの資料集 (Wolf [1927])、渡辺による邦訳 (渡辺 [1962])、渡辺が基にしたゲープハルトの資料集 (Gebhardt [1914])、ヴァルターによるその増補改訂版 (Gebhardt-Walther [1998]) はいずれも 1、2 割程度の抄訳に過ぎない。そのほとんどはイエレスがスピノザの生涯と著作について述べた部分の抜粋となっている。それは、これらの資料集がスピノザの生涯に関する資料収集を目的として

考えられる。つまり、キリスト教の内実を、ユダヤ教教的な律法やカトリック的な儀礼のように外的、特殊なものに求めるのではなく、精神的な内面性へと純化することを通して、普遍化しようとしている面が見られるのである。

13) この点は、スピノザのキリスト観とも考え合わせる必要があろう。『エチカ』第4部定理68注解の他、とりわけ『神学政治論』第1章、4章 (G. III, 21, 64-65) を始め、スピノザが「キリストの精神」との表現を用いている箇所を参照。

いるための当然の処置ではあるが、逆に言えば、イエレスの書き物が彼のものとして捉えられていないということを示しているとも言える¹⁴⁾。

かく言う私自身のイエレスに対する関心も、やはりスピノザへの関心から派生したものであって、イエレスの思想そのものに十分な関心を寄せているというわけではない。しかし、スピノザの哲学の理解のために、また、スピノザの哲学が当時の人々にどのように受け取られたかを知るためにも、イエレスの書き残したものは重要な資料である。そして、そこに盛られたイエレスの思想を明確にするためには、スピノザ遺稿集への序文を、単にスピノザの生涯を知るための資料としてだけではなく、イエレス自身の著作の1部として理解し、それを『告白』と合わせて捉える必要がある。

例えばイエレスは、スピノザの生涯を略述するに当たって、スピノザの真理への情熱、哲学への没頭に繰り返し触れている。これは、リューウェルツによる『告白』跋文が、イエレスは真理を求めて商売を止め、30年に及ぶ残りの生を研究に捧げたと証言していることと考え合わせると、興味深い符合である。

また、『告白』本文との関係からすれば、やはり遺稿集序文の中でイエレスが、スピノザの聖書解釈の意義について詳しく説いていることが注目される。なぜなら、『告白』で用いているイエレスの基本的な方法それ自体が聖書解釈であったからである。しかも遺稿集序文中のこの部分は、スピノザの哲学とキリスト教の対立を出来る限り緩和させる役割も持っている。つまり、聖書解釈問題が当時の思想空間におけるスピノザ観の帰趨を決定するものであったことも窺える。

このように、遺稿集序文からは、イエレス自身における哲学と宗教との関係の捉え方を知り、そこからスピノザ哲学と宗教の関係を考えるための、また、この問題を思想史的に捉え直すための、重要な示唆が得られるのである。

ここではもはや十分な検討は出来ないが、『告白』及び遺稿集序文を、イエレス自身の書き物として読むことの必要性だけは少なくとも確認しておきたい。それによってイエレスその人の思想が解明され、それがスピノザ哲学とその思想史的な意味の理解のために重要な意味を持つのであるから。

——本翻訳の底本と参考文献

以下に、『告白』の前書きと後書き、リューウェルツによる跋文の翻訳を示す。本文は

14) 実は、完訳ではないものの、この序文のかなりの部分を独訳、収録しているのがローレンツ・シュミットによる『エチカ』独訳 (Schmidt (Hg. u. Überstz.)) であるが、これは18世紀のものである。『エチカ』の近代語訳として最初のものであるこの書については、平尾 [2004]、平尾 [2011]を参照されたい。

6条の信仰告白と4つの本論から成っているが、紙幅の都合で、その部分は割愛する。ただ、第1条だけは『告白』の体裁を知るための参考として訳出した（具体的な処理の仕方は注を見られたい）。

テキストは基本的にリユーウェルツ版 (Jelles) による。テキストの校合のためには、スプリイトによる蘭伊対訳版 (Jelles=Spruit) を参照し、訳出に当たってはその伊訳に大いに助けられた。

また、上に触れたように、ロヴェールの仏訳とカーリーの英訳に短い抜粋が収録されているが、両者ともかなりの意識となっている部分があるため、注意を要する。

とは言え、17世紀の古いオランダ語で書かれた原テキストは、必ずしも読み易いものではない。そのため、訳者の浅見から以下の翻訳にも不備が多いものと思われる。大方のご叱正を請う。

*

*

*

翻訳：ヤーラッハ・イエレス著『普遍的、キリスト教的信仰の告白——某氏に宛てた書簡に含まれたもの』1684年、アムステルダム、ヤン・リユーウェルツ書店

[p. i]¹⁵⁾

尊敬する友よ、

私の信仰あるいは宗教に関する見解を手紙で貴方に知らせてくれるように、という貴方の熱心な求めにお応えします。貴方がそんな風に聞く理由も打ち明けてくれているのだから、なおさらのことです。その理由とはこうでした。「デカルト派の哲学者たちは（貴方は私も

[p. ii]

その1人に数えたがっていますが) 古代の異教に陥り奇妙な意見を抱いてきた、彼らの主張と基本的な原理はキリスト教と敬虔の基本原理に対立している」などと貴方に吹き込む人たちがいるからだ、と¹⁶⁾。そこでですが、私自身のことにも関わりますから、最初にお断りしておきますと、デカルト哲学は宗教についてほとんど触れてはいないので、

15) 原テキストでは、前書き部分の頁付けはないが、前書きの最初の頁を1頁目とした頁付けを、便宜的に示しておく。なお、訳文中の下線は、原文のイタリック部分である。

16) ミニーニ版の理解では、イエレスに対する批判は、デカルト主義者（またスピノザの友人たち）を無神論者であり自由思想家と同一視しようとしており、こうした非難を取り除くことはスピノザ自身の関心でもあった。

上の主張は、様々な宗派の信者ばかりか、ローマカトリックの信者にも追従者がいるということですから私が宗教について述べるところは、当然、

[p. iii]

デカルト派の見解ではなく、ただ私独自の見解ということにならざるをえないという点です。それに私は、他の人たちとの論争に関わりたいとも、中傷する人たちの口を閉じたい¹⁷⁾とも思いません。ただむしろ、貴方や貴方と同様な人たちを満足させたいと思うのです。また、普遍的な信仰箇条を記述することや、あるいはまた本質的、根本的、必須な教義を決定することは私の意図するところではまったくなく、ただ貴方に私の見解を知って頂くことだけを意図しています。しかしそれでも、

[p. iv]

あらゆるキリスト教徒に受け入れ可能な普遍的な信仰告白にとって必要な条件を遵守するよう出来る限り努力しようと思います。ヤコブス・アコンティウス¹⁸⁾の考えによれば、そうした信仰告白はすなわち、必ず知っておかねばならないこと、まったく真であり確実であること、証拠によって立証され確立されること、最後に、可能な限り聖霊によって用いられたのと同じ語句で表現されるもののみを含むことが求められるのです。さて、私がこうした種類のものだと考える信仰告白は次のようなものです。注意して読み、軽々しく判断しないでください。私が、この手紙で貴方にこれをお伝えしようとしているのは、ただ真理に従ってきた者としてだということを信じてください。

[p. 1]

第1条 神とその属性について

私は次のことを信じ、告白します。すなわち、神がいますこと、神が実際に現実存在なさること：

(「ヘブライ人への手紙」第11章6節「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。

17) 「口を閉じる」(de mont te stoppen)と類似の表現(de mond gestopt)が、恐らくはイエレスの手になると思われる、『短論文』タイトルに添えられた説明文(G, I, 11)でも用いられている(ミニ二版)。

18) ヤコブス・アコンティウス(Jacobus Acontius, c.1520-1566)はイタリア生まれの哲学者、神学者(ミニ二版によれば法学者)で、1550年にプロテスタントに改宗し、デカルト的な表題の『方法について』(De methodo, 1558)、宗教的な寛容を訴えた『サタンの策略』(Stratagematum satanae libri octo, 1565)を出版しており(Rovere)、1611年にはそのオランダ語版が出ている。イエレスが触れている条件は、第7巻(ラテン語版, p. 319)に見られる。なお、サンジャコモは『神学政治論』第14章を参照させている。

なぜなら、神に来るものは、神のいますことと、ご自身を求めるものに報いて下さることとを必ず信じるはずだからである。¹⁹⁾」)

神が唯一であること：

〔申命記〕第6章4節「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。」

〔マルコによる福音書〕第12章29節「そしてイエスは答えられた、「第1のいましめはこれである、『イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。」

〔ヨハネによる福音書〕第17章3節「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」

〔ローマ人への手紙〕第3章3節「まことに、神は唯一であって、割礼のある者を信仰によって義とし、また、無割礼の者をも信仰のゆえに義とされるのである。」

〔ガラテヤ人への手紙〕第3章20節「仲介者なるものは、一方だけに属する者ではない。しかし、神はひとりである。」

〔エペソ人への手紙〕第4章5節「主は1つ、信仰は1つ、バプテスマは1つ。」

〔p. 2〕

〔テモテへの第1の手紙〕第2章5節「神は唯一であり、神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである。」

〔ヤコブの手紙〕第2章19節「あなたは、神はただひとりであると信じているのか。それは結構である。悪霊どもでさえ、信じておののいている。）」

永遠であること：

〔創世記〕第21章33節……²⁰⁾

〔詩編〕第90篇2行……

〔イザヤ書〕第44章6節……

〔ローマ人への手紙〕第16章26節……

〔テモテへの第1の手紙〕第1章17節……

〔ヨハネの黙示録〕第5章14節……)

不変であること：

〔サムエル記上〕第15章29節……

19) 以下、聖書からの引用は、基本的に、日本聖書協会の『口語訳聖書』による。

20) 以下、聖書からの引用は、引用文は省略し、箇所のみを載録する。

[p. 3]

- 〔「詩編」第33篇11行……
- 〔「詩編」第102篇28行²¹⁾……
- 〔箴言〕第19章21節……
- 〔イザヤ書〕第14章²²⁾27節……
- 〔同〕第46章10節……
- 〔マラキ書〕第3章6節……
- 〔ローマ人への手紙〕第11章29節……
- 〔ヤコブの手紙〕第1章17節……
- 〔ヘブライ人への手紙〕第1章12節……)

全能であること：

- 〔「創世記」第17章1節……
- 〔「詩編」62篇11行²³⁾……
- 〔「マタイによる福音書」第3章9節……

[p. 4]

- 〔同〕第19章26節……
- 〔「マルコによる福音書」第14章36節……
- 〔「ローマ人への手紙」第4章17節……
- 〔同〕9章19節
- 〔「ヨハネの黙示録」第4章8節……
- 〔同〕第11章17節……
- 〔同〕第15章3節……
- 〔同〕第19章6節……)

最高の智慧を持つ、あるいは全知であること：

- 〔「使徒行伝」第15章18節……
- 〔「ローマ人への手紙」第11章33節……

[p. 5]

21) 現行聖書では27行。

22) 原文では44章。

23) 原文では12行。

〔同〕 第16章27節……
「エペソ人への手紙」 第3章10節……
「テモテへの第1の手紙」 第1章17節……²⁴⁾

そして、あらゆる善の源であること：

(「歴代誌 上」 第16章34節……
「詩編」 第25篇 8, 9, 10行……
〔同〕 12行……
「詩編」 第33篇, 各所
「詩編」 第36篇 5行²⁵⁾ ……
「詩編」 第100篇 5行……
「詩編」 第119篇64節……
〔同〕 68行……
「詩編」 第103篇, 104篇, 各所
「箴言」 第2章 6, 7節……
〔p. 6〕
「マタイによる福音書」 第5章45節……
〔同〕 第7章11節……
〔同〕 第19章17節……
「ローマ人への手紙」 第2章 4節……
「テサロニケ人への第2の手紙」 第1章11節……
「ヤコブの手紙」 第1章17節……)

天, 地や海, それらの中のあらゆるものを創造したこと：

(「創世記」 第1章 3節……
「詩編」 第33篇 6行……
「詩編」 第124篇 8行……
「詩編」 第146篇 6行……

24) 口語訳では「世々の支配者, 不朽にして見えざる唯一の神に, 世々限りなく, ほまれと栄光とがあるように, アメン」となっているが, イエレスの引用では「唯一の神」の部分で「唯一の智慧ある神」となっている。

25) 原文では6行。

[p. 7]

- 「ヨハネによる福音書」第1章3節……
- 「使徒行伝」第4章24節……
- 〔同〕第7章50節……
- 〔同〕第14章15節……
- 〔同〕第17章24, 25, 26節……
- 「ローマ人への手紙」第1章20節……*²⁶⁾

[p. 8]

- 〔同〕第4章17節……
- 「コリント人への第1の手紙」第11章12節……
- 「エペソ人への手紙」第3章9節……²⁷⁾
- 「コロサイ人への手紙」第1章15, 16節……
- 「テモテへの第1の手紙」第4章4節……
- 「ヘブライ人への手紙」第1章2節……)

あらゆるものは神に由来し、神によってあり、そして神に向かっていること：
(「ローマ人への手紙」第11章36節……)

従って、私たちもまた神の中にあり、神の中に生き、神の中で動いていること：
(「使徒行伝」第17章28節……)

[p. 9] 神はそのあらゆる被造物を、各々をそれぞれに保存し、それらを統治し、そこにおいて働くこと：

(「詩編」第36篇7, 8行……²⁸⁾)

26) ここには原注が付されており、「シリア語のテキストは非常に効果的に訳されている」として、同内容の引用が繰り返されている。イタリア人ヘブライ学者による、ヘブライ語、シリア語の聖書のラテン語訳を指す。1569年に出たその翻訳のオランダ語版が1614年に出版されている (Spruit, p. 22-23)。

27) 『口語訳聖書』では「更にまた、万物の造り主である神の中に世々隠されていた奥義にあずかる務がどんなものであるかを、明らかに示すためである」であるが、イエレスが掲げている引用とかなりずれている。特にイエレスにとってポイントであった「万物の作り主である神」の部分は、イエレスの原文を直訳すれば、「イエス・キリストを通して万物を創造した神」となる。

28) 口語訳では「主よ、あなたは人と獣とを救われる」となっているが、イエレスの引用しているところでは、「主よ、あなたは人と獣とを救う」とも「保存する」とも読める動詞 *behouden* が用いられている。

「詩編」第104, 5, 6, 7と139篇各所

「詩編」第147篇²⁹⁾ 89行……

「マタイによる福音書」第6章26節……

〔同〕30節……

〔同〕第10章29, 30節……

「ルカによる福音書」第12章6, 7と28章³⁰⁾

「コリント人への第1の手紙」第12章6節……

そして最後に、神は自分が産み出したものを善なるものとし、もっとも完全なる仕方であるものとし、もっとも完全なる仕方働くことです。

〔p. 10〕

(「創世記」第1章31節……

「申命記」第32章4節……

「詩編」第33篇4, 5行……)

私がここで神について告白し、聖書から引用した章句で確認した内容が真実であることは、他の仕方でも理解可能である。(神的本性ないし本質に注意を払い、神が完全に無限であり特別に完全であることに注意する人なら明らかな通り。)すなわち、聖書が彼らに与える証拠に加え、自然的知性を通して、それが真実であることを完全に確実に、間違いなく知ることができるのである。

第2条 神の御子と聖霊について³¹⁾ [本文割愛]

第3条 救いのために人々のなすべきことについて [本文割愛]

第4条 原罪の起源について [本文割愛]

第5条 人の墮落と復活について [本文割愛]

29) 原文では第47篇。

30) ここには引用文が掲げられておらず、欠落しているものと思われる。

31) 以下、信仰箇条の第6条までと、本論第1章から第4章までの翻訳は割愛し、他日を期することにする。

第6条 義認と救いについて〔本文割愛〕

第1章 この告白の正当性の申し立て〔本文割愛〕

第2章 聖書の意味と解釈について、ならびに、聖書に関するローマカトリックの見解の
反駁〔本文割愛〕

第3章 イエス・キリストへの祝福を与える信仰とは何か、また、義認、聖化、解放、な
どとその効果はどんなものか³²⁾〔本文割愛〕

第4章 イエス・キリストにおける、祝福を与える神的恩寵について、また、その抗い得
ない力について³³⁾〔本文割愛〕

³⁴⁾ これで私は、貴方が期待された以上のことを果たし、それゆえ貴方が私に尋ねられたことに私が十分応えたものと思って頂けるだろうと信じています。

逆に貴方には、私が述べたことを注意深く賢明に考察し、その上で私の宗教に関する見解に関して人々が貴方に示した報告がどんなものであるかを判断して頂くようお願いいたします。

〔p. 160〕

もしこの中に、貴方の目に間違っているとか聖書に反すると映る所が見つかりましたら、その点と、私が検討できるように、なぜそう思えるのかという理由を私にお知らせ下さるようお願いします。自分たちの信仰公式³⁵⁾や信仰告白の内容に合わないものは何でも聖書に反し偽だと考える人々はきっと、私の手紙に含まれている多くのものがそうした類いのものだと判断するでしょう。しかし私は確信しています。ここにあるすべてを真理³⁶⁾に照

32) この章の表題はこうなっているが、同章の欄外(出版用語で言う、いわゆる「柱」の部分)には、112頁以下で「信仰と解放について」、126頁以下で「信仰と真理について」と記されている。

33) この章の柱部分には「自由意志について」とある。

34) 以下の部分は、159頁の終わりから、本論第4章(最終章)の本文に続けて切れ目なく印刷されており、「後書き」といった見出しもなにもない。ここからすれば、『告白』の本文全体もやはり書簡の一部であると考えたくなるが、しかし、この解釈では、書簡形式の「前書き」部分に頁付けがなく、頁付けは本文から始まることをうまく説明できない。

35) 原語Formulierenは、シャーリー版英訳の注によると、パンフレットなどとして出版された、公式的な信仰要諦のこと。

36) すなわち理性の真理を意味する(ミニ二版)。

らして（真と偽、正統性と非正統性その他にとって唯一の誤りのない尺度ないし基準であると上で示したところに従って）判断する人々なら、違った風に判断してくれるでしょう。それがまた、私の貴方に期待するところなのです。

これがキリスト教に関する限りの私の見解、また、それが依って立つ証明と根拠です。今度は、そうした根拠にすぎり、そうした知識に従って生きようとする人々がキリスト教徒であるのか、

[p. 161]

そうでないのか、また、私の見解について何人かの人が貴方にした件の報告がどんなものか、貴方が判断する番です。

最後に、私としては、こうしたすべてを落ち着いた気持ちで十分に検討して下さるようお願いいたします。貴方の知性に資するところがあることを、そして、私が貴方の忠実な友であることに基づいて結論を出されることを望みます。

後記〔編者ヤン・リユーウェルツ記す〕

ここにお届けするのは、私たちの善き友ヤーラッハ・イエレスの草した『普遍的キリスト教信仰の告白』である。彼は死の直前、ある友人³⁷⁾にこの告白を渡していた。彼はこれを読んだら、発表したり印刷したりしないで、保管しておいて欲しいと頼んだのである。しかし後にこの友人は、この原稿は読むに値すると考え、印刷を企てた。[p. 162³⁸⁾] 著者の名前、彼が誰であるかは、彼と親しい関係にあった者たちには知られていた。しかし、知らない人には、次のことをお知らせしておかねばならない。彼は若い頃にはアムステルダムで食料品店を営んでいた。しかし、金銭や財を蓄積しても彼の魂を幸せにしてくれないことを悟り、彼の商売が絶頂に達し、経済的な最高潮にあったとき、正直な男に店を譲って仕事を止め、1度も結婚することもしないで、迷いの世をよそに隠棲して、信仰と合致する真理の認識、智恵に沈潜した。彼は、「天の国に入るためには働かねばならず、智恵は地から掘られ、選られた金やルビーよりも価値あるものであって、それどころか、欲し得る何ものとも比ぶべくもない」というキリストとソロモンの勧めに従い、蓄財ではなく、[p. 163] 真理の探究に30年近く身を捧げた。彼は母語以外の知識はなかったが、自分の目的にとって有益だと教えられたあらゆる外国語文献を購入し、オランダ語に翻訳させた。イエス・キリストが「正義に飢え渴いた人は満足させられるだろう」と約束して以来、彼

37) これは私の推測にすぎないが、この「友人」とは、他ならぬリユーウェルツ本人でなかったかと思う。

38) 原著では、以下には頁付けがないが、ここでは本文最後の161頁から数えた頁数を便宜的に挿入する。

は智恵と正義の重要な部分に与り、彼の魂が飢えていたものを獲得した。彼の生涯の最後の息に至るまで精神の最高の喜びと満足の内に生き、永遠に神とともに生きることを確実にするためである。生前の彼の名を知るひとはみな、彼が真理を実行していたこと、真のキリスト教徒にふさわしいと彼の信じた人生を示していたことを証言してくれるに違いない。中には彼の考えを誤解して、彼に妙な考えがあるとして受け付けない者たちもあったが、彼はこうした主張を怒るよりも憐れむべきものと考え、飽くまで神に向けた愛と認識へと〔p. 164〕より深く沈潜し続けた。彼はこうした探究において偉大な進歩を遂げたため、霊的な知性においてこれほど高い段階に達した人はなかなか見出せないほどである。しかしながら、上のような中傷がきっかけとなって、彼〔著者イエレス〕はこの告白を都市の外に住む、ある友人に送ることにした。自分の見解が、問題となっている点に関して、真理に適っているかどうかを判断してもらうためである。友人は、次のような言葉を添えてこの告白を送り返してきた。「貴方の書き物を、嬉しく読ませて頂きましたが、そこに私が手を加えられるものは何もないと思いました」。その後、我々の著者は、この『告白』に幾つかの点を加えた。著者本人がこの小著を完成させることができ、印刷に回すことが出来ればよかったであろうし、そうなればこの作をより完全なものにすることができたろう。しかし、結核に襲われ、それは叶わなかった。賢明なる読者諸氏は、この稿がそれほど完全なものでなかったことを容易に認められよう。〔p. 165〕また、順序も何カ所かでは訂正すべきところがあったが、しかし、著者自身の言葉のままにした。結びにあたって、聖三位一体に関する彼の見解は詩人のヨースト・ファン・デン・フォンデル³⁹⁾と一致しているのだから、後者の『神と宗教に関する思弁』の中から効果的な詩句をここに引用すれば有益であろう。それは次の通りである。

フォンデル『神と宗教に関する思弁』第5巻、196頁より

神の自己認識は永遠この方神の似姿を産み出す

39) ヨースト・ファン・デン・フォンデル (Joost van den Vondel, 1587-1679) は17世紀オランダを代表する詩人、劇作家、著述家。フォンデルについては、第2条の終わりでイエレス自身が言及している。「私たちがここに示した見解は、今世紀の偉大な詩人J・ファン・デン・フォンデルが神と宗教、神の子や聖霊の永遠なる生成の仕方、それらと父なる神との実体的な一体性に関する省察において述べていることと非常によく対応している。彼の信仰が多くの人に受け入れられているのも不思議ではない。彼の見解と私の告白との間の一致は簡単に辿り、理解できるものであり、父と子と聖霊の三位一体——それは多くのキリスト教徒にとって非常に曖昧で理解しがたいと思われている——が誰にも簡単に理解できるのであるから」(Jelles, pp. 26-7)。

しかしそれは第二の神にあらず, 神の自己認識は神ご自身と
いかにしても異ならず, 両者は違えなく, 同じなり
神の自己認識も, そが鏡も意識も
神にして神性, 他のものにあらず
なんとなれば, 単純性を高く戴き
複合は消え, 度合いもなく
〔p. 166〕形相と特性において残るは自身との同一
今ぞ見よ, 神の子は父の写し
類似性により父に似て
既に第二を知るといえども, 理性は
神性の本質に第三のものとならず
父と子は一体なればなり
他の何が愛を放とうか, 御身の玉座にて

親愛なる読者諸氏, 純粋な愛から書かれたこの冊子を紐解いてください。そうすれば,
あなたにもそれが伝わることでしょう。

全てを吟味してください。そうすれば, 優れていることが分かるでしょう。

さようなら。

〈一次文献・時代順 (略記号)〉

- ◎B. d. S., Opera Posthuma, 1677. (OP / ラテン語遺稿集)
- ◎De nagelate schriften van B. d. S., 1677. (NS / オランダ語遺稿集)
- ◎Jelles, Jarig, Belydenisse des algemeenen en christelyken Geloofs, vervattet in een Brief aan N. N., 1684. (Jelles) → Jalles, Jarig, Professione della fede universale e cristiana, contenuta in una lettera a N. N., a cura di Sptuit, Leen, Quodlibet, 2004. (Jalles=Spruit)
- ◎Schmidt, Lorenz (Überstz.), Spinoza. Sittenlehre widerleget von dem berühmten Weltweisen unserer Zeit Herrn Christian Wolf, 1744, in: Christian Wolfs Gesammelte Werke, 3. Abt. Bd. 15, Olsm, 1981, Nachdruck.
- ◎Spinoza, Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Hg. von

Carl Gebhardt, 1925. (G / ゲー プハルト 版)

〈一次文献翻訳・翻訳者アルファベット順 (略記号)〉

- ◎Akkerman, F., Hubbeling, H. G. en Westenbrink, A. G. (vertal.), Spinoza. Briefwisseling, uit het Latin en uitgegetekst-kritische aantekeningen voorzien, Amsterdam-Antwerpen, Wereldbibliotheek, 1992 (1st. 1977). (新蘭訳)
- ◎Curley, Edwin (trans.), The Collected Works of Spinoza, Vol. I, II, Princeton University Press, 1985, 2016.
- ◎Gebhardt, Carl (Übersetz.), Spinoza. Briefwechsel, Baruch de Spinoza Sämtliche Werke in sieben Bänden, Bd. VI, Ph. B., Felix Meiner, 1914.
- ◎Gebhardt, C. u. Walther, M. (Überstz.), Spinoza. Briefwechsel, Baruch de Spinoza Sämtliche Werke in sieben Bänden, Bd. VI, Zweite, durch weitere Briefe ergänzte Auflage, Ph. B., Felix Meiner, 1977.
- ◎畠中尚志 (訳) 『スピノザ往復書簡集』 岩波文庫, 1958年.
- ◎Mignini, F. e Proietti, O. (Trand.), Spinoza. Opere, Arnoldo Mondadori Editore, 2007. (ミニニニ版)
- ◎野沢協 (訳) 『ピエール・パール著作集』 法政大学出版局, 1978-1997年.
- ◎Rovere, Maxime (trad.), Spinoza. Correspondance, GF Flammarion, 2010.
- ◎Sangiaco, Andrea (Trand.), Spinoza. Tutte le opere, Testi originali a fronte, Bompiani, 2010.
- ◎Shirley, Samuel (trans.), Spinoza. The Letters, introduction and notes by Steven Barbone, S., Rice, L. and Adler, J., Hackett, 1995.
- ◎Shirley, S. and Morgan, M. L. (trans.), Spinoza. Complete Works, Hackett, 2002.

〈スピノザ資料集〉

- ◎Freudenthal, J. [1899], Die Lebensgeschichte Spinoza's in Quellenschriften, Urkunden und nichtamtlichen Nachrichten, Von Veit & Comp.
- ◎Freudenthal, J. [2006], Die Lebensgeschichte Spinozas, mit einer Bibliographie herausgegeben von Manfred Walther unter Mitarbeit von Michael Czelinski ; Bd. 1, Bd. 2, 2te., stark erw. und vollständig neu kommentierte Aufl. der Ausg. von Jakob Freudenthal 1899, Frommann-Holzbo.
- ◎Gebhardt, Carl (Hg.) [1914], Briefwechsel. Die Lebensbeschreibungen, Ph. B. Felix

Meiner (Baruch de Spinoza, Sämtliche Werke, Bd. 3)

- ◎Gebhardt, Carl und Walther, Manfred[1998], Spinoza. Lebensbeschreibungen und Dokumente, Ph. B. Felix Meiner (Baruch de Spinoza, Sämtliche Werke, Bd.7).
- ◎渡辺義雄編訳[1962]『スピノザの生涯と精神』理想社, 学樹書院再刊, 1996年.
- ◎Wolf, Abraham[1927], The oldest biography of Spinoza, Thoemmes Press, 1992, Reprint.

〈二次文献〉

- ◎Bunge, Wiep van[2012], Spinoza Past and Present: Essays on Spinoza, Spinozism, and Spinoza Scholarship, Brill.
- ◎Douglas, Alexander X.[2015], Spinoza and Dutch Cartesianism, Oxford University Press.
- ◎Fix, Andrew Cooper[1991], Prophecy and reason: the Dutch Collegiants in the early Enlightenment, Princeton University Press.
- ◎Fix, Andrew[1987], Radical Reformation and Second Reformation in Holland: The Intellectual Consequences of the Sixteenth-Century Religious Upheaval and the Coming of a Rational World View, Sixteenth Century Journal Volume XVIII, No. 1.
- ◎Freudenthal, J.[1927], Spinoza Leben und Lehre, Ier Teil: Das Leben Spinozas, hrsg. von C. Gebhardt, in: BIBLIOTHECA SPINOZANA. CURIS SOCIETATIS SPINOZANAE, Tom. V. (フロイデントール, J. (工藤喜作訳) [1982]『スピノザの生涯』哲書房)
- ◎平尾昌宏[2004]「形式・体系・自然——シェリング『叙述』とスピノザ『エチカ』——」松山壽一, 加國尚志編『シェリング自然哲学への誘い』晃洋書房所収.
- ◎平尾昌宏[2011]「メンデルスゾーンとスピノザ主義の水脈——その源流」『スピノザーナ』11号.
- ◎平尾昌宏[2017]「スピノザ書簡集を作る——リマスターとリミックス」『スピノザーナ』15号.
- ◎加藤喜之[2014]「初期啓蒙思想とキリスト教神学: ペトルス・ファン・マストリヒト (1630-1706) のデカルト主義批判」『キリストと世界 (東京基督教大学紀要)』24号.
- ◎加藤喜之[2015]「十七世紀ネーデルラント連邦共和国におけるデカルト主義の興亡: クリストフ・ウィティキウス (1625-87) の『スピノザ反駁』(1690)」『キリストと世界 (東京基督教大学紀要)』25号.

- ◎Nadler, Steven[1999], Spinoza. A Life, Cambridge University Press. (ナドラー, S. 『スピノザ ある哲学者の人生』 青木宏二訳, 人文書館, 2012年.)
- ◎Nyden-Bullock, Tammy[2007], Spinoza's Radical Cartesian Mind, Continuum.
- ◎桜井直文[2014] 「スピノザとオランダ・カルテジアニズム」『明治大学人文科学研究所紀要』 75号.
- ◎Spruit, L.[2004], Introduzione, in: Jalles=Spruit.
- ◎Stein, Ludwig[1890], Leibniz und Spinoza, Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der Leibnizischen Philosophie.
- ◎上野修[2006] 『スピノザ 無神論者は宗教を肯定できるか』 NHK出版 (→同著[2014] 『スピノザ 『神学政治論』 を読む』 ちくま学芸文庫に再録).

付記：現在、日本語版『スピノザ全集』の企画が進行中である。河井徳治先生と私は「往復書簡集」の担当者として共同作業を進めてきており、本稿もその過程から生まれたものである。それをこうした形で発表することをお許し下さった河井先生に感謝申し上げます。